

# 幼児教育の諸問題 (二)

新 田 倫 義



幼児の教育や研究にたずさわっている関係者は、毎日毎日の忙しい教育活動や観察、実験などに追われながらも、ときどきふと、幼児教育とは一体何なのだろうか、どうあるべきなのだろうか、というような疑問が頭をかすめて、しばらく考えこんでしまうことがあると思います。

幼稚園教育要領とか、保育所保育指針といったようなものが出されていて、教育ないしは保育活動はその線にそって行なっているつもりだけでも、果たしてこれでいいのだろうか？ 子どもの発達の実態に即して、ということがうたわれているけれども、果たしてそれをうまくとらえているだろうか？ どのように発達していくのだろうか？ 今日の活動はその発達をすすめるのに役立ったのだろうか？ もしかしたら妨げになりはしなかっただろう

か？ また研究をしている者としても、ある方法で発達の現状をとらえようとしている。測ってみれば測ってみただけのことはあって、その結果は平均値とか、パーセンテージとか、その他の数値としてあらわされる。こうです、という結果はたしかに出てくるけれども、果たしてそれで何がわかったことになるのだろうか？……人により、時によって、さまざまな疑問がわいてくるとおもいます。そんなときは、ぐんぐんと成長・発達していくあの子、この子の姿を眼にえがきながら、子どもの発達とは一体何なのだろうかを、しばらく考えてみる機会ではないかとおもいます。

私もときどきそんなふうに考えこんでしまうことがあります。そして子どもの発達と教育ということを、何とかまとめて一つの姿としておもいえがいてみようと思えるのですがなかなかうまく

いきません。部分的には、ああではないか、こうではなからうか、といったことがうかんできても、それらがまだあちらこちらにぼつりとただよっている感じです。これはちょうど、子どもの認識が、部分的にはある程度できていきながらも、その間がつかまらないで、あれはあれ、これはこれと、ばらばらな状態にあるのと似ているのではないかとおもいます。全体の姿をはっきりと描き出すことができるのは、遠い将来のことかもしれないし、また実現されないことかもしれませんが、とにかくその方向をめざしての努力は続けてみたいとおもいます。

子どもの発達について考えてみる場合、中軸となるのは「知能」の発達ということではないかとおもいます。知能というと、すぐ知能検査をおもいうかべて、「ああ、IQやMAのことか」とか、「偏差値のことか」と考えるのが普通かとおもいますが、ここではもっと広く、知的活動全体をさすものと考えことにします。それにはもちろん知識の側面を含んではいますけれども、単にそれだけではなく、知的に判断し行動すること全体をさすものとします。

このようにいうと、知的活動のみを重視して、他を無視した偏った見方ではないか、という異論がでるかもしれません。しか

し、ここで知的活動といっているのは、主体（子ども）が、目、耳、鼻、口、皮膚などの感覚器官を通して外の世界からの情報を受けとり、それを整理し判断して、外の世界の状態について認識し、それにもとづいて外の世界へ働きかける活動をさしています。つまり情報処理活動ということができるとおもいます。

もちろんこのような活動は、人間以外の動物でも行なわれていますが、人間の場合、それが認識するとか考えるとかいわれるような、高い水準のものになり、自然観・人生観・世界観というようなものにまで発展していく、つまりそのように高次の情報処理活動が行なわれるようになっていく、ということが、きわめて特徴的であるようにおもわれます。

人間は力は弱く、猛獣などにあえば力という点ではひとたまりもない存在ですが、ちえを働かせることによって、このような強い外敵からも身をまもり、高度の文化を發展させることができしました。そのちえというのが、ここでいう情報処理活動ということです。したがって、人間の子どもの発達ということを考える場合に、このもっとも人間的な活動の発達を中軸にして考えてみるのがよいのではないかとおもいます。

知的活動、あるいは情報処理活動ということの中軸にして考え

るからといって、運動とか健康とかいう面を無視するというわけではありません。人間は先ず生物として、生きなければならぬのですから、その点で健康の維持ということは重大なことです。そのためには適当な運動を行なうことが不可欠のことになります。

運動にはこれによって健康を維持増進し、知的活動を行なう主体そのものを支えていくという働きと共に、知的活動そのものにとっても大きな役割を果たしています。もしわれわれが動きまわる範囲が狭かったとしたら、それだけ外の世界から入ってくる情報も少なく、処理する仕方も限られてきてしまいます。動きまわって、さまざまな情報をとりいれることになれば、それらを整理するためにはどうしても適当な処理法をつくりだすことが必要になってきます。

アメリカの心理学者、ジョージ・ミラーは、情報処理活動における運動の役割について、おもしろい例をあげています。もし何か魔法で半分動物で、半分植物というような、特別な木が作られたらどんなことになるでしょうか。この木には光・音・におい・接触などに感ずる感覚器官があつて、これから知覚神経が精巧な脳に結ばれていて、とりいれた情報はすべて伝えることができると思います。しかし、この木には運動神経も筋肉もっていないの

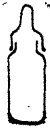
で、運動することだけは全くできないとします。するとこういう魔法の木は、他の木とどんなちがいが出てくるでしょうか。結果においては何もかわるところがないか。あるいはもっと悪いことになるかです。というのは、この木はいくら情報を取り入れたとしても、それに対して何もすることができないからです。もし森が火事になったことを知ったとしても、何の役に立つでしょうか。逃げ出すこともできなければ、仲間にしらせることもできない。ただひとりでおそろしきを感じながら、焼かれるのを待つだけになってしまいます。

それだけでなく、この木では感覚器官を動かすことができます。動物なら動くことができるので、目や耳やその他の感覚器官を自由に移動させて、いろいろな角度から情報をあつめることができます。そうするとその得た情報を組織だてる一個の対象としてまとめあげる必要もおこってくるわけです。この魔法の木では、たとえ近くにある家の表側を見ることができたとしても、その家にはそこからは見えない裏側や両側面があらうとは、想像することさえできません。ただ天井にいろいろな形をちりばめたようなのがみえるにすぎないでしょう。もしこの木の目がわれわれの目と同じような働き方をしたとするならば、網膜像が完全に同じ視細胞の上に静止しているとすれば、二、三〇秒の間にま

まったく見えなくなってしまうはずですから、この木の目は、外の世界に何か変化があったときにしか感じとることはできないのだ、ということになってしまいます。

このように、感覚はあっても運動することができない存在では、外の世界について知る、という活動も、全く質の異なった、低い水準のものになってしまう、というのです。

運動するということは、知るといふ活動にとってもこのような重大な意義をもっています。子どもがうまれてから二年ぐらいの間は、感覚と運動との間のつながりをつけて、外の世界には「物」が存在するということを学習する時期だといわれています。たとえば、いつも空腹になった頃に、左上図のような形の白っぽいものがあらわれる。手をのぼしてさわると硬くて、あたたかい。それが口のところにもってこられて唇にふれる。いい香りがし、吸いついてみると、やわらかくふにやふにやした中から甘いおいしい汁がでてくる。そのような情報や、それを獲得するための運動や、また自分自身の運動に関する情報などが統合されて、「ミルクを入れたミルク瓶」というような「物」が成り立ってくるのでしよう。外の世界には、このようなさまざまな物で満たされていて、その間がいろんな関係で結ばれている、ということが分かってくるのが、外の



世界について知ることの第一歩だとおもわれるのです。

運動というものは、実際の運動としてもこのような意義をもっていますが、更にすすんでは、実際の運動はしなくても、観点をいろいろに変えていくことによって、物や事柄をいろいろな側面からとらえて検討する、ということが行なわれるようになっていきます。スイスの心理学者ジャン・ピアジェは、これを脱中心化とよんで、知的活動の発達にとってきわめて大事なことでであると考えています。

運動のことは一応それくらいにして、他のことについて考えてみましょう。情動とか感情とかいわれるものも、知的な活動と無縁ではありません。はじめは野放しに表現されていたものが、知的活動によるコントロールを受けるようになることによって、だんだんと洗練されたものになっていくのではないのでしょうか。美しいものに感動する、といっても、どのようなものに対して美しさを感じるかは、知的な活動のいかんによるわけです。整然と簡潔にまとめあげられた知識体系の美しさ、空に輝く星と自らの心の内なる道德律の美しさに感動する、といった例を考えてみると、そこにはきわめて高度な知的活動が行なわれていることを納得できるかとおもいます。

道徳的判断のようなものにしても、人間の行動に関する深い洞察にもとづいて行なわれなければならないもので、単に、ある教えられた場合における道徳的な反感の仕方を反復する、といったものであってはならないことは多くの人がみとめるところだとおもいますが、人間行動の洞察にもとづいた判断、などというものは、これまた高度の情報処理活動であるといわざるをえません。

子どもにとっては、自分のしたいことが、他の子どもによってばまれて、できない、というような経験を通して、自分に対立する他人の存在を知り、そういう他人のやりたいことと、自分のやりたいことを、どう折り合いをつけていくか、ということを経験していくことが、大きな仕事ですが、ここでも知的活動が大きく参与していること、いや複雑な情報処理活動そのものであることは、一見して分かることだとおもいます。

たとえば、青山学院大学の瀬川良夫さんの研究によれば子ども二人の間で喧嘩がおこるためには、一方が相手によって自分の権利を侵害されたとみとめて、相手に攻撃をしかけ、相手もこれを受けて立つことが必要だとされています。この場合、攻撃をしかける側も、受けて立つ側も、互に自分の実力は相手とほぼ同じか、多少上廻っている。少なくとも、何とかすれば相手をうち負

かすことができる、という認知が、何らかの手がかりにもとづいて成り立っていることが必要です。これまたきわめてきびしい状態で情報処理活動だということができるとでしょう。

このように考えてみると、子どもの発達ということを見ていく場合、その知能、あるいは知的活動の発達ということを中軸にしてみていくことができるということについて納得できるとおもいます。

それではそれをどんな枠組を作ってみていくか、というのが次の問題になりますが、これについては稿を改めて考えてみたいとおもいます。

(国立教育研究所)

#### 幼児教育講習会

日時 昭和四二年七月二二(土)——二五(火)日

午前の部 九、〇〇——一二、〇〇

午後の部 一、〇〇——四、〇〇

会場 お茶の水女子大学講堂

主催 お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会